

保坂健二郎（キュレーター、滋賀県立美術館ディレクター）

(A) ピカソ 青の時代を超えて（ポーラ美術館）

(B) GO FOR KOGEI 2022（富山県高岡市の勝興寺、石川県小松市の那谷寺、石川県小松市の大瀧神社・岡太神社）

(C) FormSWISS（京都dddギャラリー）

【コメント】

ポーラ美術館がここ最近面白い。春までのロニ・ホーン展も圧巻であったし、秋のピカソ展では、青の時代の作品の「下の層」に着目。もう見飽きたかもと感じていた画家に、国際共同研究に基づき新しい光を当てていて、作家や作品の再評価に対する美術館の責任の取り方や、重要作品を収蔵する美術館同士の（ハイレベルな）ネットワークの形成方法について示唆的であった。企画展にあわせてテーマ設定がなされるコレクション展は、意味と物量、双方の意味でバランスがよく、そこに、村上華子のようなとんがった小企画展も実施。優れたコレクションと人材を有する美術館の可能性を見せつけられた。そこに加えて、今年9月には

駐車場システムを変更、車のナンバー4桁を入力の上で事前精算すると（カメラにナンバーを認識させることで）ゲートレスで出庫できるようになり、ストレスフリーに。HP上で駐車場の空き台数をリアルタイムに表示しているのも、車の来場者が多い地方の美術館にとって参考になる。北陸の工芸（KOGEI）展

(B) は、仕組み／アイデアと広報戦略が、つまり予算の配分方法が秀逸。京都のデザイン展 (C) は、床も有効活用。とても見づらかったが、スイス的なグリッドシステムを活用している点では論理整合的な展示デザインで、呻らされた。